

木工芸 — 中川清司のわざ —

平成 19 年度 工芸技術記録映画 35 ミリ・カラー・33 分 企画 文化庁 / 製作 日経映像

豊富な樹種に恵まれた我が国の木工芸は、大陸からの技術の伝播等によって早くから発達しました。その後、我が国特有の素材を活かした和風化が進み、近代以降、指物(さしもの)・刳物(くりもの)・挽物(ひきもの)・曲物(まげもの)など各技術分野の名匠たちによって、優れた木工芸作品が制作されてきました。

重要無形文化財「木工芸」保持者の中川清司は、杉や樫(さわら)などの軟木を用いる桶指物(おけさしもの)の技法を基本とし、長方形や三角形の部材を貼り合わせる「木画」(もくが)や「榎合わせ」(まさあわせ)の技法に高い技量を発揮しています。この映画は、神代杉(じんだいすぎ)を用い、木目が作り出す幾何学的な文様を装飾に活かす中川の緻密な木画技法のわざを、制作工程に従って忠実に描き出しています。



中川 清司 (なかがわ きよつぐ)



- 昭和 17 年 京都の桶指物師の家に生まれる
- 昭和 38 年 父・中川亀一に師事し桶作りを学ぶ
- 昭和 47 年 第 19 回日本伝統工芸展入選
この頃、黒田辰秋の研究会に参加、黒田の提案で桶の箍(たが)と底板を外す技法を創案、その技法を黒田が「榎合わせ」と命名
- 昭和 49 年 竹内碧外に師事し、指物の技法を学ぶ
その後、神代杉と出会い、その素材としての魅力を追求するようになる
- 昭和 50 年 第 22 回日本伝統工芸展東京都教育委員会賞受賞
- 昭和 58 年 第 30 回日本伝統工芸展日本工芸会会長賞受賞
- 平成 13 年 重要無形文化財「木工芸」の保持者に認定される
- 平成 15 年 紫綬褒章受章



◆ プロローグ ー木の国日本ー

日本は、木を大切に活かす文化を発展させてきた国です。温暖で湿潤な気候が樹木の育成を促し、木は人々の暮らしの様々な場面に活用されてきました。



◆ 正倉院宝物 ー木画の箱ー

「朽木菱形木画箱」。

正倉院には、木目を活かした見事な調度を見いだすことができます。



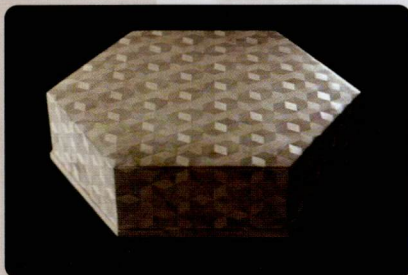
◆ 年輪と木目

年輪は、木の生命の証と言えます。年輪を縦に割ると木目が現れます。木目には柾目と板目があり、木の芯を通るように割った時に現れる真直ぐな木目を「柾目」（まさめ）と呼んでいます。



◆ 木工作家・中川清司

京都に住む木工作家・中川清司は、「柾目」を活かす技法で独自の境地を開き、平成13年に国の重要無形文化財「木工芸」の保持者に認定されました。



◆ 「神代杉木画六角箱」

中川の代表作のひとつ「神代杉木画六角箱」。神代杉特有の繊細な木目が幾何学的な意匠を際立たせている木画の作品です。光の変化一つで木画の表情が変わる、中川の「柾合わせ」の技が見て取れます。



◆ 桶作りから「柾合わせ」へ

京都の桶指物師であった父の下で修業を重ねた中川は、先輩の木工作家・黒田辰秋に出会い、その研究会でアドバイスを受け、「柾合わせ」を創案します。さらに、唐木技法で知られる竹内碧外に指物の高度な技法を学び、独自の道を拓きました。



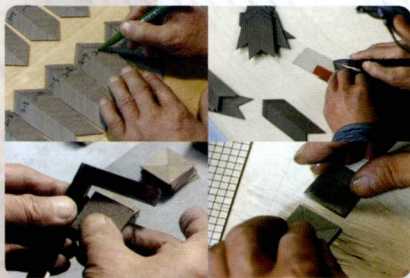
◆ 新作の構想 ー京都のイメージー

新しく制作する木画の箱の意匠には、祇園の石畳や北山杉などのイメージを活かします。紙で実寸大模型を作り、全体の調和を確認します。



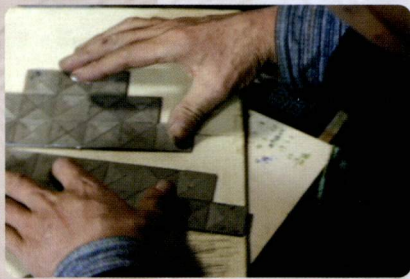
◆ 木取りと切り出し

一枚の神代杉の板から同じ柾目を持つ部材を何組取るか、アクリル板で作った型を使い、木取りをします。バンドソーで切り出し、さらに厚さ3ミリ、14枚、7対の板にします。



◆ 木画部材作り

今回の木画の意匠は、市松模様のパターンにしました。神代杉の柾目を活かした部材作りが進みます。



◆ 部材作りと接着

柾目の直線の縞模様を美しく組み合わせるためには、いかに正確に部材を組み合わせ接着させるかがポイントになります。ソクイにボンドを混ぜた接着剤を使ったり、セロハンテープを仮留めに用いたり、中川独自の工夫が目立ちます。



◆ 木画板の完成

今回は1,200枚近くの部材を貼り合わせ、木画の板を市松模様に仕上げていきます。部材を貼り終わると、木賊(とくさ)を使って荒磨きに入ります。…構想・設計からおよそ一ヶ月、天板と側板計5面の木画がその姿を現しました。



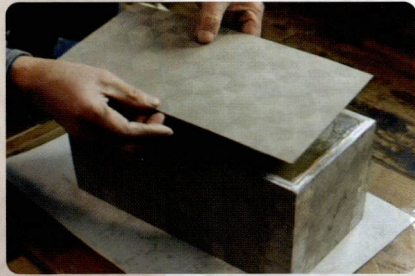
◆ 「神代杉」の故郷

山形県と秋田県の境に聳える鳥海山。その噴火によって火山灰に埋もれ、2,600年もの間地中に眠っていた「神代杉」の大木。その独特の風合いが放つ不思議な魅力が中川を捉えて離さないのです。



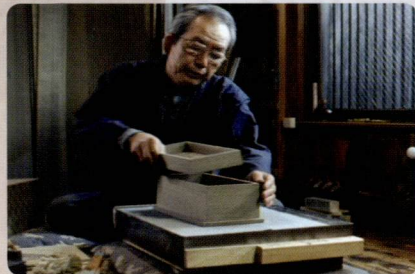
◆ 組み立て

裏打ちを済ませた木画板を完全に密着させると、板の合わせ目の留形に雇いざねを施し、組み立てます。4枚の側板が箱形に組み立てられ、立体の形が生まれていきます。



◆ 天板作り

木の収縮の安定を図り、天板の裏側を豆ガンナとヤリガンナで削り、表面の甲盛はセンなどの道具で微妙な曲面に仕上げます。



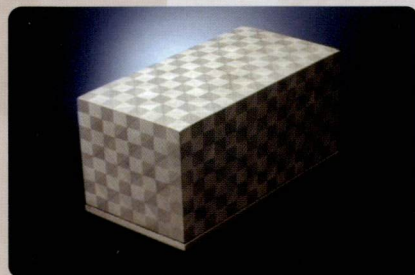
◆ 身の組み立て

神代杉の柾目板で身を組み立て、身の上段となる懸子の底板には木画を組み込みました。蓋がゆっくと沈み込むようにするため、側面には微妙な傾斜を付けておきます。



◆ 仕上げ磨き

目の粗い紙ヤスリで表面を削って汚れを取り、次に、竹べらに巻いた目の細かい紙ヤスリを使い、市松模様の線が連続するように形作った後、木賊、砥石、いぼた蠟を使い分けて磨きます。



◆ 新作・神代杉木画箱の完成

神代杉という素材に取り組んで来た中川が、30年にわたる創意を組み込んだ木画の箱が完成しました。

伝統の技に独創と工夫を追求する中川の新たな作品作りへの想いは尽きません。

協力 石山寺 喜多院 京都国立近代美術館 宮内庁正倉院事務所 財団法人 土門拳記念館
奈良国立博物館 渡部銘木

スタッフ 製作 / 佐野文男 撮影助手 / 藤原千史 ネガ編集 / 長沼ヨシコ
構成・脚本 / 佐野文男・有泉寧 進行 / 牛込政雄 タイミング / 三橋雅之
演出 / 有泉寧 ナレーター / 窪田等 ミキサー / 門倉徹
撮影 / 大木大介 音楽効果 / 山崎茂之 録音 / 東京テレビセンター
照明 / 古屋熱 タイトル / 鶴岡秋育 現像 / IMAGICA